東京新聞　2014年（平成26年）3月8日（土曜日）
©中日新

心災

神戸より強い「見捨てられ感」

むしばむ 1

十二月には珍しい大雪が降る中、宮城県石巻市の雑居ビルの前で小柄な女性が出迎えてくれた。二階に事務所を構える東日本大震災圏域創生ＮＰＯセンター事務局長の太田美智子さん（六二）。半年がかりで被災者らの心の状態を探るアンケート結果をまとめた。

回答を寄せた二百一人のうち、八割近くの人が「記憶が飛ぶ」など何らかの心の後遺症を抱えていた。「比較的前向きな人もいれば、まだ途方に暮れている人もいる。心の状態に格差が生まれている」という。

震災直後、太田さんと同じ避難所に身を寄せていた四十代の男性は「息すらしたくない」と記していた。避難所では、がれきを分け入って街の様子を見に行き、皆に状況を伝えてくれるなど頼もしい存在だった。もともと独身で、今は仮設住宅に一人で暮らす。派遣切りに遭い、希望の見えない三年間が男性を引きこもり状態へと追い詰めた。

「震災後、心に障害が降りかかった人たちがいる」。太田さん自身、心の後遺症に直面しながら暮らす。

＊　＊

二〇一一年三月十一日、石巻港近くを車で走っていた。揺れを感じ、高台に必死で逃げた。沿岸部の大街道の自宅は一階が津波で壊れた。不仲だった夫との溝は決定的となり、一人避難所に移り住んだ。

市内の施設にいた認知症の母を仙台に移したり、避難所の運営を担う中でＮＰＯをつくったり。多忙な一年余りが過ぎたころ、異変に気付いた。いつも気持ちが落ち着かずそわそわする。記憶が飛び「今私何をしてるんだっけ」と思うこともたびたび。料理の味付けもできなくなった。典型的な心的外傷後ストレス障害（ＰＴＳＤ）症状だった。

太田さんはＰＴＳＤについて学ぶワークショップに参加し、自分に起きていることを理解できた。だが崩れていく心に向き合えない人たちもいる。

「仮設で死ぬ」と絶望し、酒におぼれる高齢者たち。子どもたちがやり場のない気持ちをぶつけるため、ＮＰＯにある縫いぐるみはぼろぼろになった。

「神戸では今も心の問題に対応しなくてはならないと聞く。ここでも長い時間軸で考えていかなくては」

＊　＊

太田さんの言葉を聞き、阪神大震災から十九年がたった神戸を訪ねた。被災で家などを失った人の話し相手となる活動を今も続けるＮＰＯ法人「よろず相談室」の理事長牧秀一さん（六四）は「震災後の傷痕は今なお深刻」と話した。復興住宅は高齢化で自治会機能が維持できず、認知症で徘徊する人も多い。「死にたい」と言われることも増えた。

石巻にも支援に通う牧さんは「見捨てられ感が神戸のときより強い」と感じる。もともと高齢化が進む被災地。見守り手となる若い世代が足りず、生活再建も容易ではない。「神戸で二十年たって起きていることは、石巻では五年で起きる」

×

東日本大震災の被災地で、長引く仮設住宅での暮らしなどが人びとの心をむしばんでいる。死者・行方不明者数が最多だった石巻市で、深刻さを増す「心災」と向き合う人々を訪ねた。

（この連載は、小林由比が担当します）

◀長引く避難生活で、子どもたちの気持ちを受け止めてぼろぼろになった縫いぐるみ＝宮城県石巻市で（中嶋大撮影）

アンケートの方法と結果　昨夏、東日本大震災圏域創生ＮＰＯセンターのメンバーが市内の仮設住宅に配り歩くなどして実施。10～80代の201人から回答を得た。

心の状態について「よく気落ちする」「時々めいる」など９項目を挙げて尋ねたところ、76％にあたる153人が、少なくとも一つは該当すると答えた。最多は「ストレスを感じる」で31.8％。「記憶が飛ぶ」と答えた人も15.9％に上った。

関連2面